

306. 蒲生郡蒲生町竹ノ鼻遺跡の出土品について

平成7年度、竹ノ鼻遺跡範囲内の県道が改良工事により拡幅されるため、財団法人滋賀県文化財保護協会により試掘調査が実施され、その結果近世窯でよく用いられる窯道具（匣鉢）が採取された。平成8年度の発掘調査では、江戸後期の連房式登窯「石塔窯」とともに16世紀の「刀鍛冶遺構」も検出された。

発掘調査後整理調査がおこなわれ、平成10年度に発掘調査報告書（註1）が刊行されたが、調査担当者である報告者の力不足により、大量の出土遺物の十分な分析ができず未報告の資料も多い。そのうち石塔窯出土品に印された刻印については、財団法人滋賀県文化財保護協会刊行の「滋賀県文化財だより260号－1999年12月10日－」で報告した。今回は両遺構の未報告遺物について報告したい。

なお、石塔窯や刀鍛冶遺構など竹ノ鼻遺跡の主要遺構は「テラス3」で多く検出された。「テラス3」は石塔集落の裏山にある下から3段目のテラス状小平坦地である。

1. 石塔窯

第1図1から第2図53までが石塔窯出土遺物である。1～13は土鍋の焼台で、1は窯尻から出土しており重焼に用いる針ピンの跡が6箇所ある。2～13は大きさ形状がほとんど同じで、登窯上部の第6室から重なり合うように出土している。

焚口付近からは、17（筒碗）と23（土製の敷板）が出土している。23はに上部ワドチが付着している。

焚口の上の第1室の床面直上からは20（丸碗）が、室内堆積土からは24（匣鉢）が出土している。

2室の床直上からは、25（片彫の綾杉文がある香炉）、26（筒碗）、27（片口）、室内堆積土から19（丸碗）が出土している。

3室床直上からは14（篋書きによる文字が記された土製敷板）、18（土鍋の底）、21・22（筒碗）、27（片口）、28（片彫の簾文がある香炉）が出土している。

使用済の窯道具や焼成不良の製品の捨場である物原からは29、30（片彫の菊水文がある香炉）、31、

32（丸碗）、33（鉢）、34（鍋の焼台が溶着した土鍋の底）、35、38（土瓶、35は片彫の菖蒲文がある）、37（土鍋）、39（鉢）、40（片彫の綾杉文がある香炉）、41～44（碗の底）、45、47、51（土瓶の蓋）、蓋（46）、（49）異形瓦、）50（片口、52、53（匣鉢）、74は土瓶の肩部であるが、陶石を練って紐状にしたものを帯状に張り付けている。

25、28、29、30、35、40、45、74は今回初報告であり、石塔窯製品の装飾に片彫文様が4種、新たな貼付文1種が多かったことになる。

「テラス3」からは75（1cm程度の細い溝の刻まれた砥石）が出土している。大きさは27cm×15.6cm、厚さ3.3cmで内外面に細い溝状の跡が残っている。土瓶等の模様を掘る彫刻刀を研ぐために使われたものか。

2. 刀鍛冶遺構

刀鍛冶遺構は炭や鉄滓、鍛造薄片が埋土中に含まれる「土坑SK02」と鉄滓・鞆羽口・中世遺物等コンテナ20箱が斜面に吹寄せられるようにかたまった「テラス3斜面遺物溜」からなる。

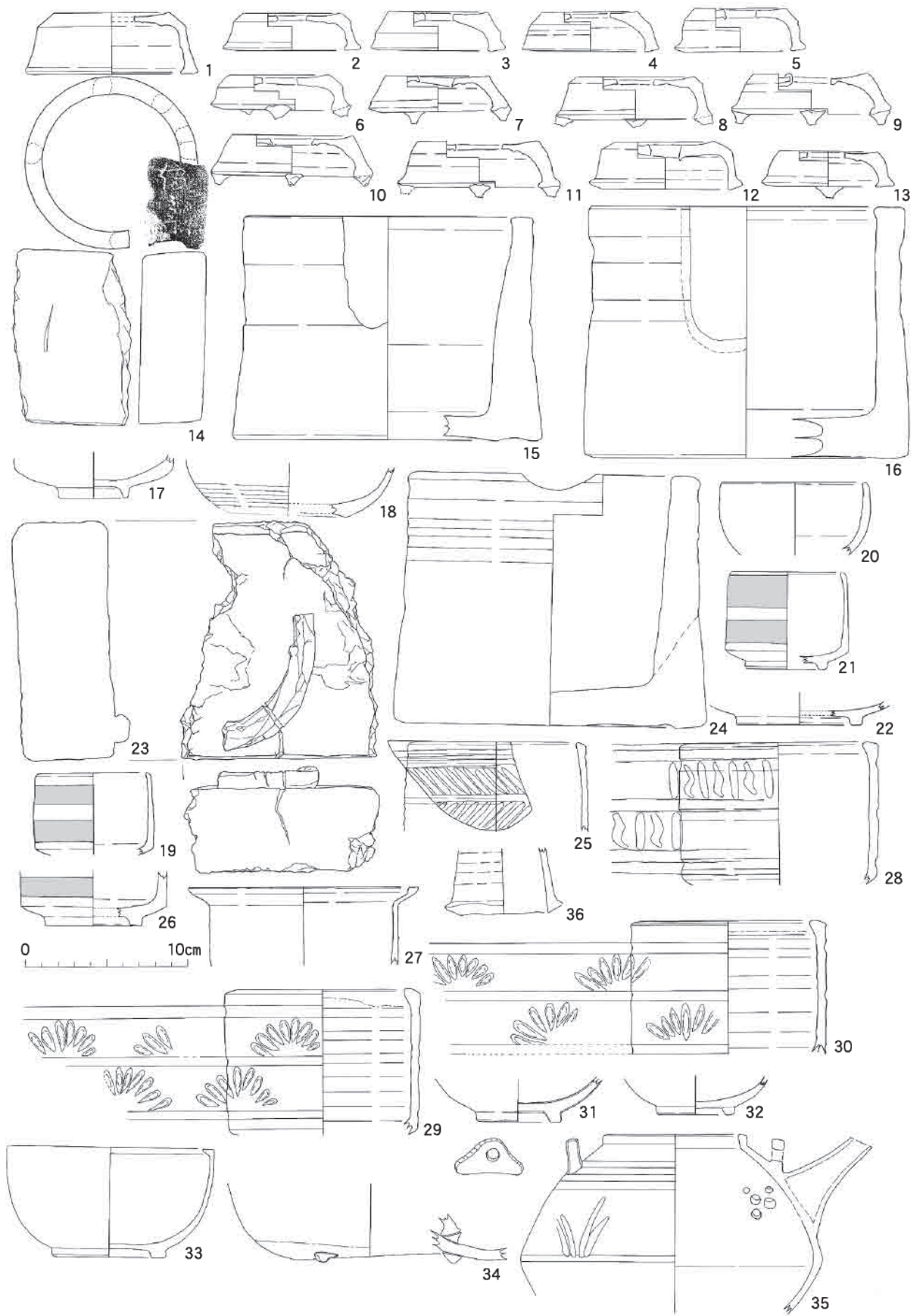
54～57は「テラス3斜面遺物溜」からコンテナ20箱の鉄滓と一緒に出土した遺物で、54（中国製青花磁器碗）、55（瀬戸・美濃褐釉小壺）、56（瀬戸・美濃天目）、57（瀬戸・美濃鉄釉皿）である。これらはどれも16世紀中頃の資料である。「テラス3」からは70（瀬戸・美濃灰釉縁溝皿）も出土している。

石塔の刀鍛冶については、「新刀石塔派」の発生地とされその初現は14世紀といわれている（註2）。

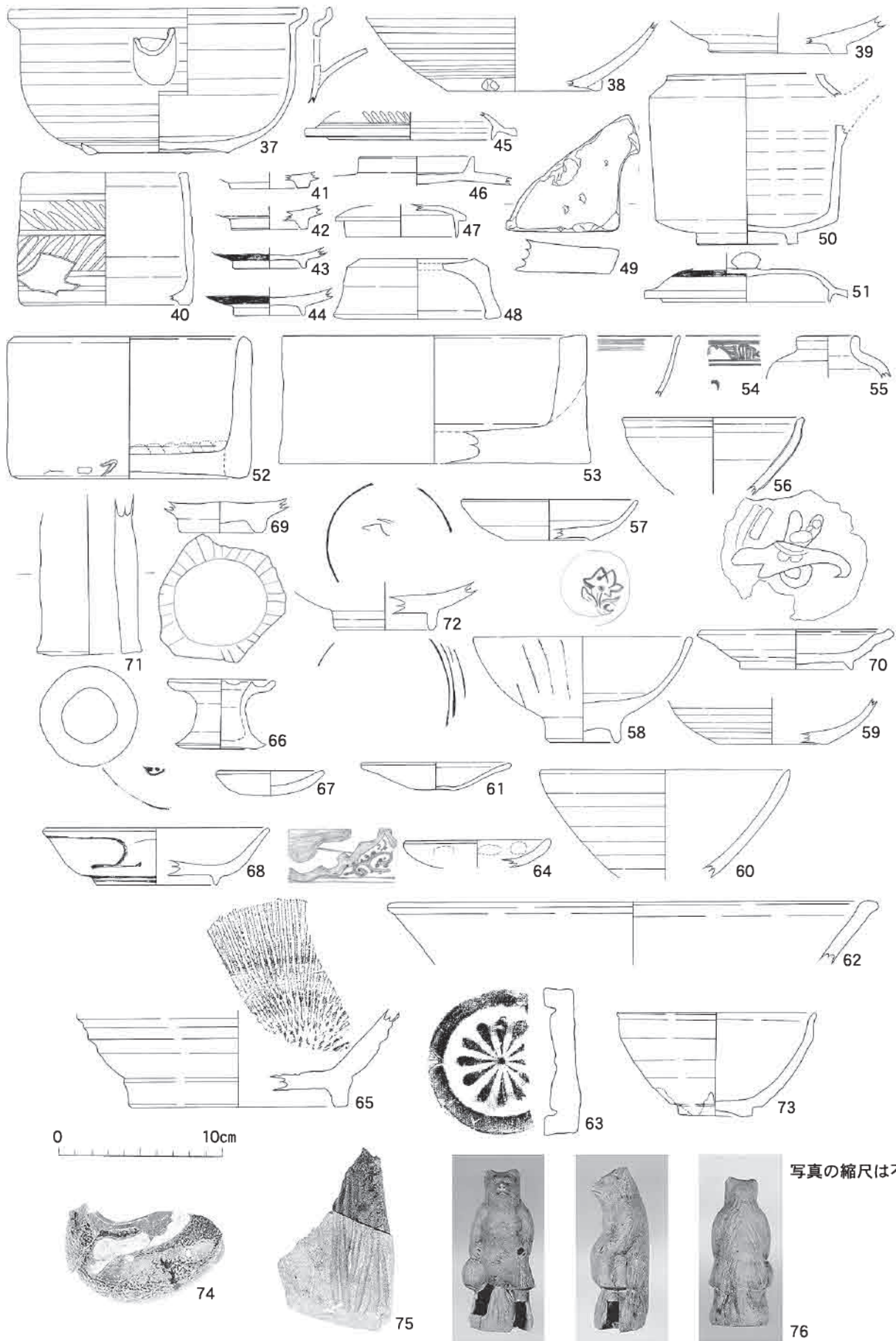
作品として「江州蒲生住助長作 明応八年八月日」銘（1499年）を持つ脇差、「江州蒲生住助長作」銘の刀がある。

また助長作ではないが、大永二年（1522年）三条長吉作と伝えられる京都祇園祭長刀鉾の長刀には「天文法華の乱（天文元年－1532－）のおり、六角氏に押捕られた（この）長刀を江州石塔寺麓の住鍛冶左衛門太郎助長が買い戻して（祇園社の小院である）感神院に寄進した」との銘文が刻まれている。

竹ノ鼻遺跡の鍛冶遺構の伴出遺物は16世紀中頃であることから石塔派の活躍した時代と重なるのではないと思われる。



第1図 竹ノ鼻遺跡出土遺物(1)



第2図 竹ノ鼻遺跡出土遺物(2)

3. テラス2 出土遺物

「テラス3」の1段下の「テラス2」は「テラス3」から流れてきた溝SD01があるが、そこからは58（中国製青磁蓮弁碗－16世紀前半－）、59、60（瀬戸・美濃灰釉平碗－16世紀前半－）、59（土鍋の底－18世紀末－）、61（かわらけ）、62（信楽焼播鉢－16世紀－）、63（軒丸瓦）が出土している。

「テラス2」の外周溝からは、64（かわらけ）、65（信楽焼播鉢）が出土している。

石囲の中心にあるSK01からは66（信楽焼脚付灯明台－19世紀－）、67（かわらけ）、68（波佐見焼染付深皿－18世紀前半－）が出土している。

その他調査区付近採取中国製陶磁器72（青磁碗）、青磁蓮弁碗（69）が採取されている。

4. テラス3 出土狸人形

76は高さ15cmと小型で、半分ずつ型を取り、貼合わせ作る。近代になって考案された信楽の狸より顔が尖っており体もスマートである。また、笠を被っていないことも信楽の狸と違う。出土したのがテラス3の表土からで、石塔窯生産品であると断言できないのが残念であるが、狸の人形としては近世に遡る貴重な例といえる。

5. 近代瓦の刻印

刻印を有する平瓦は、石塔窯の左上のテラスから2点（77、78）、物原から1点（79）、テラス3からは4点（80～84）出土している。

刻印は77「大極（上）石塔 瓦善・・」、「と」、78「モ」、79「七」、80「石」、81「ト」、82「キ」、83「〇」、84「不明」である。

石塔は瓦の生産地である。創業は18世紀末に遡る家もあるようで、「現在でも1軒の工場が生産をしている。（註2）

平成二年刊行の『岐阜県・滋賀県実業沿革史 滋賀県之部 製瓦部』（実業参考社発行）には、近江八幡瓦屋十八軒に次ぐ石塔瓦屋七軒（中野善蔵、中野治平、中江清太郎、村田佐兵衛、中川喜左衛門、吉川重郎兵衛、安井清五郎）が記載されている。（註3）

中野善蔵と村田佐兵衛は同書に印銘が記載されている。前者は「〇」に「と」、後者は「〇」に「七」でそれぞれ77と79に該当する。

77は凸面には「大極（上）石塔 瓦善・・」とあることから、中野善蔵は「瓦善」という屋号であった可能性がある。「〇」に「ト」の印銘も中野善蔵の瓦屋産かもしれない。「〇」に「石」の印銘は石塔産の意であろうが、「〇」に「キ」の印銘は中川喜左衛門であろうか。

なお、平成10年の発掘調査報告書に記載した出土遺物のうち土製敷板には「安井」の刻字を有するものと「〇」に「や」の印銘を有するもの（同278）があり、後者は瓦の印銘と同類形である。

近世後期、陶器と瓦の両方を生産する産地として、兵庫県の明石市があげられるが、石塔も瓦陶兼業する窯元があった可能性が刻印から推定できるのではないか。（元財滋賀県文化財保護協会 稲垣正宏）

註1 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会「竹ノ鼻遺跡－蒲生郡蒲生町石塔－」

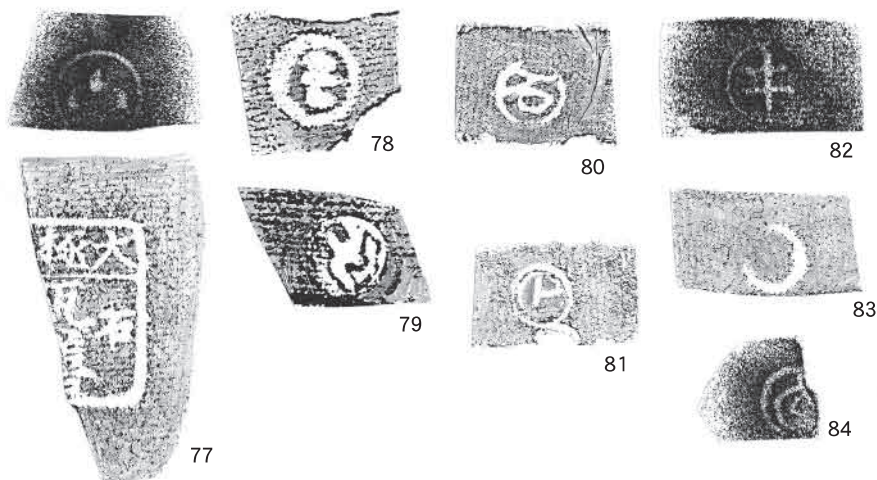
平成10年12月

2 岡田孝夫 財団法人滋賀県文化財保護協会

「近江刀工の遺跡」『文化財教室シリーズ61』

1983年2月28日

※蒲生町史編纂室の諸先生方には貴重な御教示をいただいた。記して謝意を表したい。



第3図 竹ノ鼻遺跡出土瓦の印銘